

伊藤永之介年譜

1903年（明治36年）

11月21日、父祐義、母ムメの五男（二人は夭折）として、秋田県西根小屋末丁11番地（通称池永小路、現中通）にて出生。栄之助と命名された。八人の兄弟姉妹。本籍は、秋田県北秋田郡上小阿仁村小澤田45。一家は開業していた菓子屋が失敗した直後で、書画骨董を扱ったり、内職をしたりしながら生計を立てていた。

1910年（明治43年）

秋田県中通尋常小学校入学。高等科の頃より伊藤薫草の筆名で少年雑誌に投稿し始める。

1918年（大正7年）

3月、中通尋常小学校高等科卒業。父の事業失敗のため、中学校進学は叶わず、補習科に進む。父が狩野派の画家に師事した経験があり、絵を描くのが得意だったが、読本に載っていた夏目漱石「草枕」の「峠の茶屋」の一節「おいと声をかけたが返事がない」を読み、文学に惹かれるようになった。六月、補習科を中退し、八月に設立された日本銀行秋田支店に行員見習い（文書係）として勤務。

1919年（大正8年）

「少年倶楽部」や「日本少年」に投稿し始め、アララギ派の歌人やフブキ会の俳人と交友する。国民新聞の懸賞短編小説に応募し、入選。伊藤紫明（二葉亭四迷にあやかるとされる）の筆名を使用。銀行の筋向いにあった石川書店にて文学書を読むようになる。芥川龍之介、菊池寛、葛西善蔵を始めとする新進作家たちや、トルストイ、ツルゲーネフ、チェーホフ、ドストエフスキー、モーパッサン、ゴーゴリー、ゾラなどの翻訳を読破する。とくに、志賀直哉とチェーホフを愛読。

1920年（大正9年）

5月、銀行を辞職。毎日のように秋田県立図書館に通って、国内外の書籍を乱読。

とりわけ、チェーホフを中心とするロシア文学に親しんだ。

1921年（大正10年）

二月に創刊された『種蒔く人』土崎版を、秋田県の石川書店で目にして感銘を受ける。三月、新秋田新聞社に入社、記者生活に入る。四月、本名の伊藤栄之助で『国民新聞』の懸賞短編小説に応募した「酒」が、一等に入選（賞金10円）。

1922年（大正11年）

記者生活の傍ら、秋田市の同人誌『詩星』、『金砂（かなさ）』（佐々木陽光方金砂倶楽部）、『ボーフラ』（秋田魁新報社内ボーフラ社）に文芸評論などを発表し始める。北村光の筆名を併用。

1924年（大正13年）

1月、今野賢三の紹介状を持参し、金子洋文を頼って上京。洋文は、参宮橋にあった長屋の一棟で妹と同居、隣には中西伊之助、近所に青野季吉が居住していた。一ヶ月程度居候暮らしをし、2月、洋文の紹介でやまと新聞に校正係として入社。しばらくは部屋代を捻出できず、野外や輪転機の脇の部屋で寝泊まりした。6月に創刊された『文藝戦線』（第一巻第二号）に、「新作家論（一）」を執筆、横光利一、犬養健、前田河広一郎等を論じた。同人の不評を買う。富川町の木賃宿で失意の底にいるとき、川端康成から『文芸時代』への執筆依頼が届いた。以後、同誌に文芸評論を発表、注目されるようになる。やまと新聞は、約束と異なり、校正作業が夜まで続いて神経衰弱になり、半年で退社。夏、秋田荒川鉦山見学。後の「見えない鉦山（やま）」のモチーフを得る。そのときの案内役に、秋田女子師範を出たばかりの松田解子がいた。小説「泥溝（どぶ）」（『文藝戦線』9月号）発表。筆名に、伊藤永之介を使用。

1925年（大正14年）

5月、河合仁を中心とする雑誌『潮流』に加入。7月、『文党』創刊、村山知義、サトウハチローらと参加。文芸評論家として活躍する。

1927年（昭和2年）

11月、和崎豊之、ハルの長女輝子と結婚。渋谷区代々木上原の一軒家に所帯を

持つ。半年後、空き巣に入られ貴重品を全て盗まれたため、西荻窪の金子洋文宅に引っ越し。結婚を機に、小説専念を決意。『文藝戦線』が縁で、生涯の盟友、鶴田知也を知る。

1928年（昭和3年）

3月、労農芸術家連盟に加入。『文藝戦線』に正式に参加、1932年の廃刊まで編集に携わる。同誌に「見えない鉦山」（6月号）、「木枕」（9月号）、「山越え」（12月号）発表。同郷の小牧近江の紹介により、『少女画報』編集担当の工藤恒を知り、同誌に短編を毎月掲載させてもらう。以後二年間、その原稿料のみで生計を立てるが、生活は貧困を窮めた。

1929年（昭和4年）

12月、長女苜子（ちさこ）誕生。

1930年（昭和5年）

春、体調悪く千葉県保田にて保養。5月22日、初の短編集『恐慌』（文芸出版部）刊行、小説『暴動』（日本評論社、11月15日）の原稿料で貧窮生活を凌ぐ。『暴動』は細田民樹の推薦。小説『平地蕃人』（『中央公論』12月号）によって、「植民地もの」がスタートする。代々木上原1156に転居。

1931年（昭和6年）

1月、『文藝戦線』、誌名を『文戦』と改め、文芸雑誌から大衆啓蒙誌への転換を目指す。1月22日、父、秋田市で死亡。作品を読んで訪ねてきた朝鮮人の李が一時同居。彼の助言も得て書き上げた小説「万宝山」を『改造』（10月号）に発表、宇野浩二の好評を得る。秋、東北大凶作の知らせが入り、強烈な衝撃を受ける。

1932年（昭和7年）

5月15日、労農芸術家連盟解散、翌日、青野季吉、金子洋文らと労農文化連盟結成。『文戦』は7月号で廃刊。7月、左翼芸術家連盟を立ち上げ、機関誌『レフト』創刊。小説「春遠し」を前田河広一郎の紹介によって、『日本国民』（8月号）に発表。この年寄り、秋田県雄勝郡幡野村（現湯沢町）金谷在住の農民

作家新山新太郎との文通が始まる。夏、代々木上原 1332 に転居。

1933 年（昭和 8 年）

春、『レフト』四月号が発禁。「冬」「離合」「路上」などの身辺告発小説を書く。「冬」で説話体の実験。

1934 年（昭和 9 年）

2 月、第二次労農芸術家連盟発足。年末、川合仁の新聞文芸社に入社。月曜評論を担当し、地方有力紙に評論を掲載。この頃、鶴田知也一家と共同生活。

1935 年（昭和 10 年）

11 月、川合仁が創刊した『日本学芸新聞』の編集を担当。代々木西原 863 へ転居。

1936 年（昭和 11 年）

1 月より、同人雑誌『小説』を始める。新山新太郎に濁酒に関する取材を依頼。小説「梟」（『小説』第 1 巻第 7 号）発表、第四回芥川賞候補となる。12 月、永之介宅に滞在中の母、死去（60 歳）。

1937 年（昭和 12 年）

川合仁の勧めで、新聞文芸社を退社。創作に専念する。「梟」を改稿して『文学界』七月号に発表。好評を博し、第六回芥川賞候補となる。代々木西原 867 へ転居。

1938 年（昭和 13 年）

3 月、『娘地主』（版画荘）、5 月、『鴉』（版画荘）刊行。「鶯」（『文藝春秋』六月号）に発表。この二作が第七回芥川賞候補となる。宇野浩二命名による「鳥類もの」という呼称が用いられるようになる。10 月、長男一生（かずお）誕生。11 月、有馬頼寧農林大臣の支援で農民文学懇話会結成。会員となる。

1939 年（昭和 14 年）

1 月、『馬』（新潮社）、2 月、『雁』（春陽堂）、3 月、『二子馬』（新潮社）、6 月、

『作家の手帖』（金星堂）、8月、『牛』（改造社）、10月、『熊』（東亜公論社）、11月、『燕』（金星堂）、12月、『湖畔の村』（新潮社）より刊行。4月、「鶯」で第二回新潮社文芸賞受賞。監督豊田四郎で映画化。

1940年（昭和15年）

8月、『離村記』を新館（にったち）書房より刊行。9月、『炭焼き』（実業之日本社）、10月、『朝市』（河出書房）刊行。

1941年（昭和16年）

3月、長男一生、疫痢で死去。3月、『都会と田舎』（新世社）、8月、『故郷の春』（学芸社）、9月、伝記小説『石川理紀之助』（新潮社）刊行。

1942年（昭和17年）

1月、次男日出夫誕生。5月、『医者のみる村』（宝文館）、7月、『平田篤胤』（偕成社）、9月、『鴨と鮎』（三杏書院）、11月、『路地の人々』（国土社）より刊行。

1943年（昭和18年）

10月、秋田県平賀郡横手町（現横手市）上田中に疎開。義妹高橋ミサオ宅に同居。8月、『春の別れ』（偕成社）、『海の鬼』（佃書房）を刊行。12月30日、湯沢の新山新太郎を訪問。

1944年（昭和19年）

1月、三男晴之助誕生。4月、横手町水上「杉清」の別荘へ移る。細々ながら、大根、じゃがいもなど、畑作りを始める。7月、陸軍報道班員として湖南作戦に徴用。漢口に赴くも、戦線には行かず、農村のスケッチに勤しんだ。11月に帰国。11月、新風土記叢書の一冊として『秋田』（小山書店）より刊行。

1945年（昭和20年）

3月、鶴田知也一家が、永之介の妻輝子の強い勧めで疎開してくる。数ヶ月間同居。9月、『雪日記』（新紀元社）、10月、『美しい旅』（世界社）、11月、『田舎ぐらし』（柏葉書房）を刊行。

1946年（昭和21年）

3月、『狐のゐる丘』（富国出版社）、6月、『故郷の歌』（信友社）、刊行。4月、妻輝子の母和崎ハル、戦後初の参院選に出馬し、トップ当選。秋田県初の女性代議士になる。

1947年（昭和22年）

日本人民文学会に参加。8月、金子洋文、小牧近江らと雑誌『明日』発行。

1948年（昭和23年）

1月、鶴田知也、雑誌『秋田文学』創刊。3月25日、妻輝子の実家に転居。11月、埼玉県志木町に単身で寄寓。

1949年（昭和24年）

1月、世田谷の弟祐蔵宅に同居。文壇復帰第一作「雪代とその一家」脱稿。『群像』3月号に発表。9月、世田谷区北沢に転居。長女、鶴田知也長女励子とともに、身の回りの世話をするため上京、三人で暮らす。

1950年（昭和25年）

渋谷区代々木の三井家に間借り。四月、妻、息子、上京。約一年半ぶりに家族が揃う。9月、上原1226に転居。

1951年（昭和26年）

文戦作家クラブ結成。5月1日に『文戦』が復刊、その中心的存在に。10月、「村のナイト・クラブ——一本木町警察日記」（『小説新潮』）発表、「警察日記」シリーズの嚆矢に。

1952年（昭和27年）

12月、義母ハル死去。12月、『警察日記』（小説朝日社）より刊行。

1953年（昭和28年）

4月、『文学入門』（信友社）刊行。5月、森山啓編『伊藤永之介集』（河出書房。「鶯」、「鷗」、「馬」、「燕」、「牛」所収）、9月、金子洋文らと社会主義作家クラ

ブ結成。その機関誌『社会主義文学』を創刊、編集責任者となる。10月、「五郎ぎつね」で第二回小学館児童文学奨励賞受賞。11月、電源工事場を『新潮』11月号に発表。

1954年（昭和29年）

秋、日本農民文学会結成（会長和田伝）。10月、『なつかしい山河』（みすず書房）刊行。

1955年（昭和30年）

1月、『刑務所志願』（山田書店）、2月、『梟、鶯、馬』（角川文庫）、6月、『谷間の兄弟』（東方社）、『警察日記』（北辰社）、7月、伊藤永之介編『農民詩集』（新評論社）、8月、『続警察日記』（角川文庫）、9月、『新警察日記』（新潮社）を刊行。日活映画「警察日記」（監督久松静児）封切り。3月、奥羽文学会発足会に出席。6月、金子洋文の脚色で「警察日記」が上演（新国劇・明治座）される。

1956年（昭和31年）

1月、『鶯』（河出書房）、3月、『山櫻』（河出書房）、9月、『決定版 警察日記』（六興出版）、11月、『売春婦』（村山書店）を刊行。日本農民文学会会長に就任。3月中旬、四国を旅する。下旬、新潮社主催の紀行「作家故郷に行く」により秋田県内を歴訪。9月、文化使節として一ヶ月半中国各地を旅行。

1957年（昭和32年）

2月、『駐在所日記』（村山書店）、小説「南米航路」を『朝日新聞』夕刊に連載（6月19日～10月19日）。11月、『南米航路』（角川書店）を刊行。12月、金子洋文の脚色により、「鶯」上演（新国劇・大阪歌舞伎場）。

1958年（昭和33年）

夏、雑誌『地上』からの依頼で「へき地の子供達」というルポルタージュを書くため、秋田県東成瀬村大柳に、伊藤緑郎（当時大柳小学校校長）を尋ねる。

1959年（昭和34年）

2月、『民話 自然と人生についての四十話』（五月書房）、八郎瀧干拓を描いた

『消える湖』（光風社）刊行。表紙に、『文芸秋田』同人の小川元生の写真を選ぶ。7月22日、午後5時過ぎ、自宅二階の書斎で、郷里秋田の一青年のために就職依頼状を書いている途中、脳溢血で倒れる。26日、午前5時57分、金子洋文始め、『社会主義文学』『農民文学』の友人たちに見守られながら、永眠。27日、午後1時より渋谷区代々木上原の自宅にて告別式（神式）。会葬者約1000人。8月4日、秋田市八橋の全良寺にある伊藤家の墓に納骨。

1960年（昭和35年）

3月、最後の長編小説『署長日記』（新潮社）刊行。NHKテレビで、連続ドラマ「警察日記」放送（3月8日～29日）。7月26日、秋田市内護国神社横に、伊藤永之介文学碑除幕式挙行。碑文は「山美しく人貧し」。

参考文献

桜井増雄「伊藤永之介年譜」『伊藤永之介追悼の記』羽後文学社、1960年。

高橋秀晴「伊藤永之介年譜」分銅惇作編『国文学解釈と鑑賞別冊 伊藤永之介生誕百年』至文堂、2003年。

「略年譜」『作家・伊藤永之介』秋田県教育委員会、1985年。